

11月のハロウィンの喧騒が終わると、地元のスーパーや商店街で赤い服を着て、杖を持っているおじいさんが現れ子供を優しく抱擁し、お菓子を配り始めます。このおじいさんがSt. Nicolas (サンニコラ)、Sinterklaas (シンタークラス)です。この文章では名前をサンニコラに統一します。

サンニコラは4世紀に小アジアのミュラに実在した司教のことです。歴史上のサンニコラは、初期のキリスト教伝説で、嵐に遭遇した旅人を助け、幼い子供たちを守護し、貧しい者に贈り物をあたえるとして尊崇されたとされています。サンニコラの物語は、たとえば、貧しい家族のために金貨のはいった財布を窓から投げ込んだ話など、史実としては疑わしいものも多いのですが、プレゼントの贈り主としての役割が強調されるようになりました。そして、ローマやゲルマンのさまざまな異教で信じられていた贈り物の主の伝説と融合したそうです。

ベルギーでは一般的にサンニコラは子供たちが良い子にしていたご褒美にサンニコラの祝日である12月6日にお菓子をくれる子供たちの守り神とされています。しかしこの風習、わずかにベルギーとオランダ、ドイツとフランスの一部にしか残されていません(聖人としてのサンニコラを祀る風習は各国に残っていますが)。サンニコラはロバに乗りお供のペールフェーター(Pere-Fouetar)と一緒にみんなの家を訪ね、もし悪い子がいればペールフェーターにお仕置きされると言われています。

この前日の夜、子供たちはベッドに入る前、お皿の上にお礼としてサンニコラの乗ってきたロバの大好物のにんじんと、強靱な体のペールフェーターへはエネルギー補給のためのジャガイモ(又はビール)、そして翌年のお菓子を作るためのお砂糖を載せてサンニコラが来るのを楽しみにしています。朝になるとそれらの代わりにお菓子がのっていると信じています。

以前話を伺ったアントワープの方の話ではサンニコラはスペインに住んでいて船でやってくるそうです。そしてサンニコラが配るお菓子はそのお母さんが作っているとのこと。サンニコラがお供えとして受取った大量のお砂糖を使ってお菓子を作るのだそうです。このスペイン説は冬場に豊富にビタミンを含んだ果物がオレンジしかなかった時代、大量のオレンジがスペインから船で運ばれてきたことにも関係するとのこと。今でもブラッセルやアントワープでは「サンニコラを迎える集い」が開かれ、たくさんの子供達が港に集まります。

そしてこのプレゼントを贈る習慣が17世紀にアメリカへ移住したオランダ系プロテスタントが持ち込み、そしてこの伝説を素に後日のサンタクロースを作ったと言われています。特に貧しい家庭に金貨を投げ込んだ逸話のなかに、こぼれ落ちた金貨が窓際に干されていた靴下に入ったとされていることから、クリスマスプレゼントを靴下に入れる習慣になったそうです。初めの頃のサンタクロースはサンニコラ同様、濃いえんじの服装でしたが、アメリカの有名な飲料会社がCMにサンタクロースを使うため、コーポレートカラーの服装にしたのが始まりです。

サンニコラの習慣はベルギーでは大人も楽しみにしている日になっています。職場に現れてお菓子を配っている企業もあります。

さてここでエノー州で一般的に伝えられているサンニコラのお話を紹介しましょう。

昔、3人の仲の良い子供がいました。子供たちは一緒に森に遊びに行きました。3人は遊びに夢中になり、気がつくと夜になっていました。そして家に帰る途中に一軒の肉屋を見つけました。

「ねえねえ、肉屋のおじちゃん。今日はもう日が暮れちゃったからここに泊めてくださいな」「いいとも、いいとも。さあ入った入った!場所ならいくらでもあるよ!」親切に答えてくれた肉屋のおじさんですが、暗闇のせいか、子供たちは肉屋を怖く感じ、すぐに中に入りませんでした。するといきなり、肉屋が3人に飛びかかり、子供達を死なせ、そして細かく切り刻み塩漬けにしてみました。それから7年がたちました。サンニコラが肉屋を訪れました。「すいません、今日ここに泊めていただけませんか?」「おお、これはサンニコラさま、ようこそ、ようこそ。さあ、どうぞ、どうぞ。場所ならいくらでもありますよ」

肉屋がサンニコラを中に招き入れると「あのですねえ、ここに3人の子供の塩漬けがあると聞いたのですが、それを見せてくださいな」「ええ!なぜそんなことを知っているのですか?」肉屋は驚いて店から逃げ出しました。サンニコラは店の中に入り「おーい、そこで寝ている子供達。私はサンニコラだよ!」と呼びかけ3本の指を差し出しました。すると、なんと子供たちはすぐに生き返ってしまいました。「ふぁ〜、よく寝た。」「僕も」「なんだか天

国に行ってみたみたい」。めでたしめでたし。